

# 現場発見

Site Discovery

## 丁寧に繕い、新たな工夫を加え 念仏の場を次世代につなぐ

金沢別院境内整備事業  
 (金沢教区宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌記念  
 真宗大谷派金沢別院境内整備事業作業所)

戦国時代から北陸の信仰の拠点となってきた真宗大谷派金沢別院は戦後、木造の本堂を焼失した後に鉄筋コンクリート造で再建され、多くの門徒をはじめとする人々に親しまれてきた。現在、五〇年近くを経て銅板葺きの大屋根を全面的に葺き替える改修工事が終盤に向かっていている。金沢別院本堂の元施工である松井建設(株)は伝統建築に強く、同社が培ってきた匠の技で、若手の安江康介所長のもと、修復される建築と技術が次世代に受け継がれていく。



### 木造時代からの元施工会社が 改修を手掛ける

新たなランドマークとなった金沢駅の鼓門から真宗大谷派金沢別院(東別院)までは徒歩で七、八分。百万石通り、兼六園や金沢城といった中心街へ向かうエリアに位置し、金沢別院の大門の沿道に発達した門前町は近年整備されて新旧の商店が軒を連ねている。

金沢別院は親鸞聖人(一一七三―一二六二

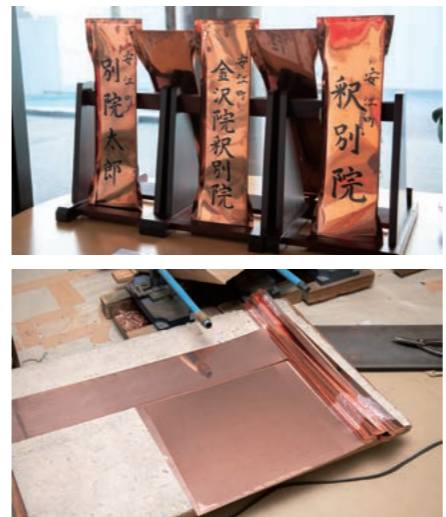


改修が進む金沢別院本堂の屋根。地上約30mの高さに位置する棟の木下地の傷んだ部分を補修しているところ。材の傷みは少なく、一部のみを新材に取り替えた。この端部に「鬼瓦」(「鬼錆(かざ)り」「大鬼」とも。p.42の写真参照)を取り付ける。本堂を覆う仮設の素屋根は特注の防災シートで製作したもの。透過性を持つため明るい環境で工事が進行している。

年)を宗祖とする浄土真宗の京都・東本願寺を本山とし、戦国時代に北陸の門徒衆によって金沢の地に建立されてから四七〇年以上の歴史を持つ。現在の安江町に寺基を定めたのは一六三四年。建物はたびたび炎上したが、その度復興を遂げた。戦後は一九六二年に木造の本堂が焼失し、七一年に鉄筋コンクリート造で再建。それから四七年を経た現在、屋根の葺き替えをはじめとする大掛かりな改修工事が進んでいる。改修設計は市内に本拠地を置く(株)長村建築事務所、施工は木造の時代からの元施工会社、松井建設(株)である。同社の歴史は北陸との結びつきが強く一五八六年に富山県井波で創業。現在は本社を東京へ移したが、今も「社寺の松井」と呼ばれ、これまでに培ってきた技術と経験が



改修工以前の金沢別院本堂(2017年撮影/写真提供:松井建設(株))



右/上層の軒からの雨落ちにより傷んでいた下層の屋根面の中ほどに、ステンレスと銅板の二重葺きが施されている。下地モルタルの上に改質アスファルトルーフィングを敷き込み、それぞれの葺板を雨落ちのラインから2m前後にわたり施工している。

左上/銅板の葺板の見本。寄付された約3万枚で葺かれる。裏面には寄付者の名前が記されている。

左下/軒付などの役物の葺板は現場で板金屋根の職人が銅板を切断、ハゼを加工し、屋根葺きを行っている。

ら多くの実績を上げている。金沢別院の現場を率いる北陸支店の安江康介所長は、現場から五分ほどの近隣で生まれ育った三六歳。もともと社寺建築を手掛けたという動機で松井建設に入社したというから、その願いが叶った現場でもある。

改修内容は、本堂については銅板葺き屋根の葺き替えが主要な工事である。更に外壁の補修・再塗装、本堂入口のバリアフリー化のためにスロープの増設、渡廊下の解体・新設など。更に南側の東別院会館の一部改修と、外構工事も行われる。

### 復元と改良のために知恵を絞る

本堂の平面は三五畳四方。高さは三〇畳を超える。銅板葺き屋根は入母屋形式で上層・下層の二層の反り屋根で構成され、下層の正面に下屋を付け下ろしているが、その姿は切妻の白い素屋根にすっぽりと覆われて、内部の様子は見えない。「現在、葺き替え工事の真つ最中で、大屋根の上層はほぼ葺き終わり、下層と下屋は下地の補修と葺き替えの途中です」と安江所長。解体から屋根葺きまでの工程が並行した時期には三〇人ほどの技能者が作業していたという。安江所長に改修工事の要点を挙げてもらった。「改修前の通りに、忠実に復元することが重要ですが、それだけではありません。より良い建物をつくるために改良が必要な銅板もありま



### 工事概要

発注者：真宗大谷派金沢別院  
 設計：株式会社長村建築事務所  
 施工：松井建設株式会社 北陸支店  
 工期：平成29年7月18日～平成31年6月27日  
 構造：RC造3階建て  
 敷地面積：9,908.66㎡  
 建築面積：3,422.47㎡  
 延床面積：5,932.56㎡

す」。その一つに、屋根の傷みの激しかった箇所があるという。「上層の軒からの雨落ちによって、直下の下層の部分が傷んだことが今回の改修のきっかけになりました。特に銅板の葺板の繋ぎ目となるハゼに亀裂が入るなどして、漏水の恐れが出てきたため、早急に改修しようと別院様が判断された経緯があります」。ハゼは曲げ加工や熱による伸縮によってダメージを受け、それが原因で漏水が発生してしまう。改良のためにはどのような工夫をするか、金沢別院の監理者長村氏、安江所長をはじめとする技術スタッフに屋根工事に携わる協力会社を加わり検討を重ねた。その結果、銅板葺きの下にステンレス葺きを施し、二重葺きとすることに決定した。豊富な経験から過去の施工事例に詳しい磯見浩之工事長は「銅板葺きの下に単純にステンレス

葺き上がった大屋根上層の軒。長さは約35m。改修前と同じように軒反(のきぞ)りの美しいラインが通っている。RC造の屋根本体の軒先部分は木下地で構成されており、修繕前に型板を取ることで軒先を復元している。

現場  
Site Discovery  
発見



上／金沢別院系列の金沢幼稚園は本堂の北側に位置していたが、改修と同時に沿道側にずらして新築された。施工は松井建設。園庭が広くなり、園舎は明るく、金沢らしい格子のデザインが取り入れられている。

左／屋根を仕上げる工程で重要な軒先の木下地を施工する現場スタッフに声を掛ける安江所長。「技術と経験を持っている現場スタッフに力を発揮してもらうことも所長として大切な仕事」と語る。



上／外壁の改修はほとんど完成している。古い塗料を剥がし、モルタル下地のひび割れを補修。打音検査で浮きが見つかった部分にエポキシ樹脂を注入して固定の上、再塗装した。組物は中空のプレキャストコンクリート製。

下右／これから尾垂木の小口に金箔押しを施した錆（かざり）金物を取り付ける。

下左／屋根の妻壁の虹梁（こうりょう）の上に葦股（かえるまた・左）と呼ばれる部材が飾る。

板を敷き込んだ例はありますが、それでは不十分です。今回の二重に葺く方法は初の試みになります」と語る。現場を案内してもらおうと、ちょうどその部分の施工中で、雨落ちのラインの前後二層の範囲で銅板葺きの下にステンレス葺きが見取れた。二重葺きは手間は掛かるが、効果的な工法として今後には生かせる可能性があるという。

### 丁寧、忠実な下地づくりが復元を支える

上層の足場まで上がると、間近に見る銅板葺き屋根はいかにも迫力がある。すでに葺かれた軒先は流れるようなラインを描いて四方に反り上がっている。両端に向かって軒の厚みが増し、

屋根面もカーブを描く。複雑な形状をどのように復元しているのだろうか。鍵を握るのは下地だと安江所長は言う。「軒反りと屋弛みは三次元の曲面が入ってくるので、設計図だけでは難しいんです。コンクリートの屋根本体の軒先には木下地が取り付けられていますが、補修したり取り換える前に型板を取っておき、それに合わせて新材で木下地を復元します。葺板の割り付けも型紙を取るんです」。軒先の仕上がりは下地の精度に左右される。型を取るといふ昔からの知恵が忠実な復元を可能にしていた。

今回は既存の下地が健全に保たれていた部位が多く、屋根面のモルタル下地も補修で対応しているという。目視と打音検査を行い、クラックを補修し、浮きのある部分は除去してモルタルを塗り直した。外壁についてはモルタルが浮いた箇所裏側にエポキシ樹脂を注入して定着させ、再塗装を施している。

### 「鬼瓦」の取り付けが山場に

屋根の最高部に当たる棟の位置まで足場を上がると、補修された木下地の状況を見ることができた。ヒノキの新材で補った部分もあるがほとんど健全で、コンクリートに木下地を接合する鉄骨やボルトの汚れを落とし、錆止めを再塗装するなど、仕上げの準備が整っていた。「これから、ここに『鬼』を取り付けます」と安江

所長。鬼（鬼瓦）は地上に下ろして補修中だったが、その様子にも驚かされる。鬼の木下地はブロック状の木の塊で、重さは二〇〇キログラム。千葉県の板金作業所へ輸送し、銅板を被せ、鬼の形を打ち出すという。「火で銅板をあぶりながら打ち出すので、専門の作業所で行います。その作業が難しい」。頂部に載る「経の巻」という筒状の飾りと、両側に付く「鱒」と呼ばれる部分を彫刻した飾りも木下地から打ち出される。鬼の中心には真宗大谷派の抱き牡丹の紋を象った銚金物が付くが、同じく軒廻りの組物や高欄などの銚金物も再利用され、その数は約二〇種類五〇〇個に上る。これらは京都で汚れを落とし金箔押しを施す作業が進められている。

屋根工事の工程は順調に進んでおり、安江所長の声は明るい。この後の山場をたずねると「鬼の取り付けと、足場の解体ですね。鬼が出来上がり、木下地ごと棟に上げるのは十二月ごろになるでしょう」と答えが返ってきた。気になるのは足場の解体が一月の降雪の時期に掛かることだ。落雪が塀の屋根や人に直撃しないように緩衝用の足場板を設けるなど対策を施しているが、天候が工程に影響する恐れがある。三年前から学校や住宅など、一般建築の現場をまとめ、足場が取れる時に最もやりがいを感じてきたという安江所長。スケジュール調整を乗り越え、本堂が復元した姿を現場スタッフとともに見上げる喜びはどんなにか大きいことだろう。

## Q この現場で発見したことは何ですか？

A 屋根を解体しながら昔の仕事をみて、機械技術が現在よりも低かった50年前に、RC造でよくこれだけの規模の寺院をつくり上げたと思いました。コンクリートも現在のように工場で作る生コンをミキサー車が運んでくるのではなく、現場練りだったと聞いています。先輩社員や職方の知恵、技術力のすごさを感じましたね。職人さんはその道のスペシャリスト

ですから、専門分野の知識や経験を私よりも持っています。それを引き出すのが私の役目だと考えています。そのためには私の考えを簡潔に伝えることが必要ですし、一緒に物をつくっていくという気持ちで進めることがいい結果につながると思います。この現場でも、銅板屋根の職人さんや協力会社の方々の経験のなかから適切な解決策を見つけ出していくことができました。



松井建設株式会社  
北陸支店  
建築部 工事課 作業所長  
**安江康介**  
Kosuke Yasue



右／改修前の「鬼瓦」。上部に円筒状の「経の巻」、左右に牡丹の彫刻を打ち出した「鱒（ひれ）」が取り付けられている。中央の銚金物は宗紋の抱き牡丹。本体から経の巻の上まで高さは1.3m。（写真提供：松井建設様）  
上／「鬼瓦」の木下地。銅板を被せて打ち出し、木下地とともに棟に取り付ける。既存の材はほとんど健全な状態が保たれていた。上部には「経の巻」、両側に「鱒」などを、それぞれ銅板を打ち出して取り付ける。



現場  
Site Discovery  
発見